

松元町郷土誌

松元町郷土誌

松元町町章



松元町の“マツ”を図案化し、円は町民の融和、団結を表し、右に伸びる翼の“ツ”は町勢の発展伸長を鳥で象徴しています。

松元町町民憲章

お茶のかおりと伸びゆく若さをほこりとする
わたしたち松元町民は

だれともえがおではなしあう

いつでもひろくふかくかんがえる

どこまでもこんきよくやりとおす

みんなそろってよりよくいきる

という信条をもって明るく豊かな町をつくります。



松元町町民歌

内 与詩守 作詞
 涉 秀豊 作曲

明るくのびのびと

mf

ひのしまーのぞむこーげんに

おちやのかーおりもただーよって

ゆめさわーやかにあけわたる

あかるいじちにひとーのわの

あふれるえがおうるーわしく

mf

ああわがーさとよまつもとちょう

松元町町民歌

一、火の島のぞむ 高原に

お茶の香りも ただよって
 夢さわやかに 明けわたる
 明るい自治に 人の和の
 あふれる笑顔 うるわしく
 ああ わが郷よ 松元町

二、鉄路はつねに 新しい

時代のいぶき 通わせて
 霧降る谷に こだまする
 みんなの知恵を 寄せあつて
 住みよいくらし はかりゆく
 ああ わが郷よ 松元町

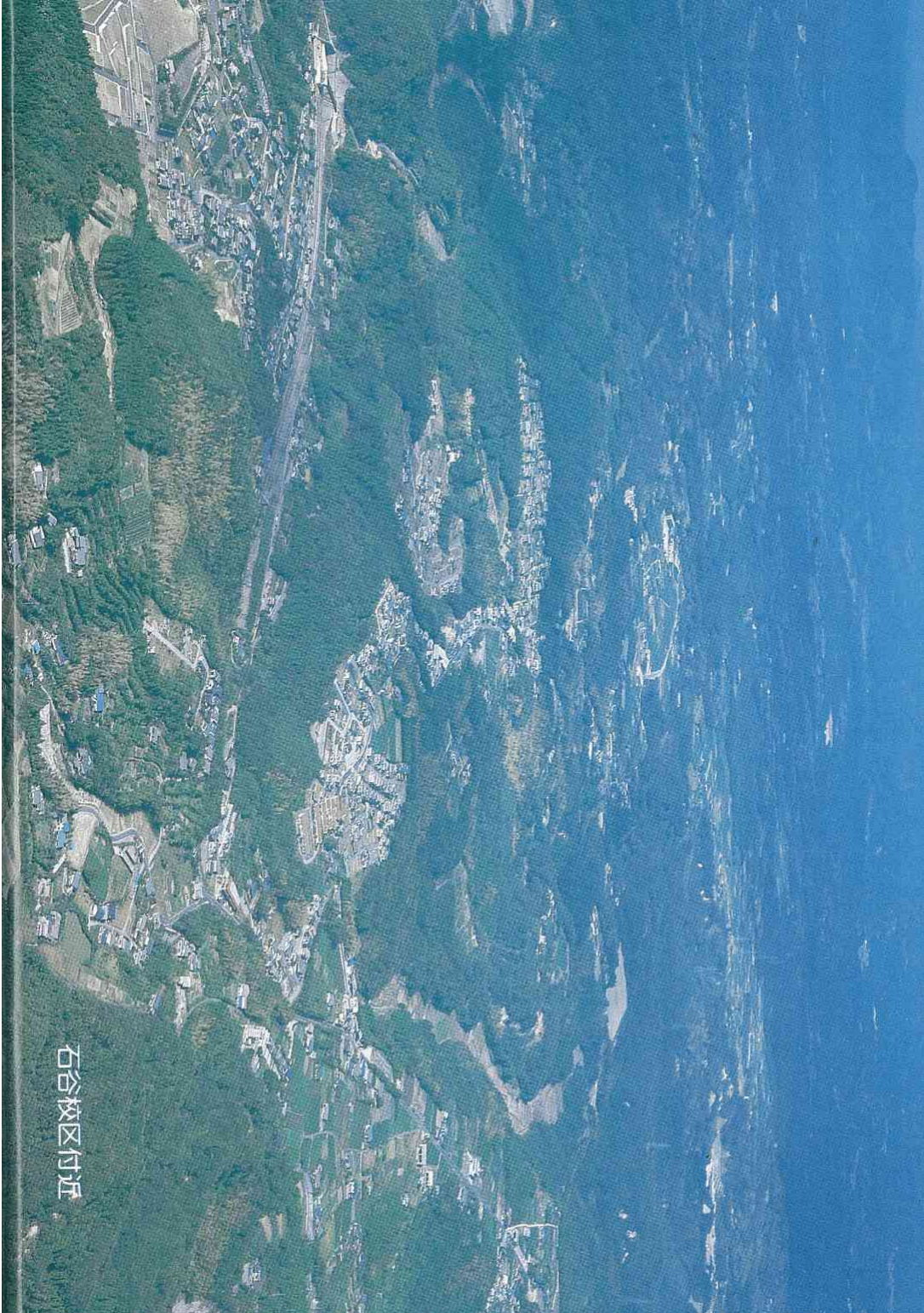
三、伸びゆく都市の輪の中で

自然の恵み 拓きつつ
 山河にあすの 虹を見る
 燃えたつ意気も たからかに
 ゆたかな文化 呼ぶところ
 ああ わが郷よ 松元町



松元校区付近

石谷校区付近





香山校区付近

栗昌校区付近



歴代村(町)長・議長

歴代村長



2代 町田 実央

明治30年6月8日就任
◇ 34年6月7日退任



初代 遠竹 友衛

明治22年6月8日就任
◇ 30年6月7日退任



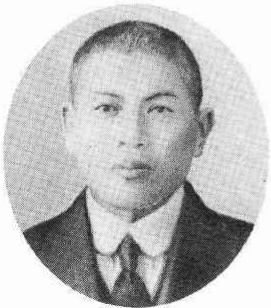
4代 四元 矢之助

明治38年6月8日就任
大正6年6月7日退任



3代 森 幸左衛門

明治34年6月8日就任
◇ 38年6月7日退任



7代 吉永 長之進

昭和4年6月8日就任
◇ 5年3月9日退任



6代 倉内 藤一郎

大正10年6月8日就任
昭和4年6月7日退任



5代 森山 友二

大正6年6月8日就任
◇ 10年6月7日退任



10代 篠原喜角

昭和10年12月10日就任
◇ 18年12月9日退任



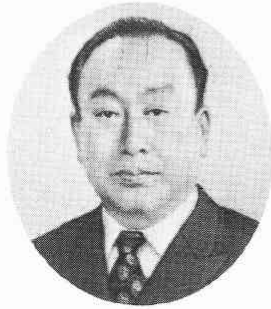
9代・11代 上竹原善次郎

昭和9年4月1日就任
◇ 10年11月25日退職
◇ 18年12月10日就任
◇ 21年12月10日退任



8代 石原源十郎

昭和5年4月1日就任
◇ 9年3月31日退任



第2代 奥武雄

昭和50年5月1日就任
◇ 52年4月30日退任



13代 東純男

昭和30年4月30日就任
◇ 35年3月31日退任
初代町長
昭和35年4月1日就任
◇ 50年4月30日退任



12代 末永善助
公選初代

昭和22年4月5日就任
◇ 30年4月29日退任



第4代 九万田萬喜良

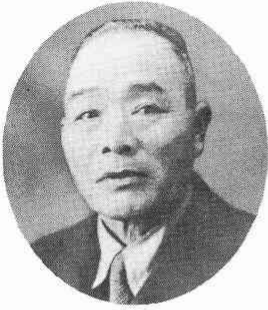
昭和59年3月7日就任
在任中



第3代 畠中市太郎

昭和52年5月1日就任
◇ 59年3月6日退任(死去)

歴代議長



2代 四元米二

昭和30年5月6日就任
◇ 34年4月30日退任



初代 坂口暎吉

昭和22年5月8日就任
◇ 30年4月30日退任



5代 吉満光男

昭和50年5月9日就任
◇ 54年4月30日退任



4代 畠中市太郎

昭和42年5月6日就任
◇ 50年4月30日退任



3代 松元国武

昭和34年5月18日就任
◇ 42年4月30日退任



7代 池田義光

昭和58年5月1日就任
在任中



6代 吉井満徳

昭和54年5月4日就任
◇ 58年4月30日退任

発刊のことば

松元町長 九万田 萬喜良

永年その発刊が期待されていた、わが町の郷土史がここに発刊されることは、この上ない慶びであります。

編纂に当たられた委員の皆様は、その委嘱に応え長年月にわたり、より幅広く、より正確な把握を主眼として調査集録をしていただきました。委員の中には、高齢のため死去されたり、病床にあるなどその御苦労が偲ばれます。過去の歴史、先人の生活や業績、史跡など知り、現在と比較し、未来への創造こそ町の発展はあるものと思われまます。

高齢化社会、技術革新、高度情報化、国際化など社会経済情勢の変貌する中、次の世代へつながらようとしていく今日、これがわが町の教育、文化、産業の振興や観光その他幅広く有効に利用され、本町発展の資となることを希望いたします。

本史の発刊をお慶びするとともに、永年調査執筆に献身努力された委員の皆様や、豊富な内容の資料を提供いただきました河口貞徳先生、総括監修などお引受けくださった有馬俊郎先生に深甚の敬意と謝意を申しあげます。

昭和六十一年三月

郷土誌の発刊にあたって

教育長 新 屋 憲 男

昭和三十八年「松元町郷土史第一輯」が、本町に残る史蹟の説明を中心に編集刊行されてから、二十年余を経過し、残部は既になく、入手することは至難な状態になりました。

さらに、郷土の歴史全般にわたる総合的、体系的郷土誌の出版を望む声が、年を追って高くなりました。

昭和五十三年頃から、「郷土誌編集委員会」が本格的に、資料収集活動に力を入れ始めました。しかし第一輯に述べられているように、郷土関係文献の乏しい本町においては、非常に困難な事業でありました。

委員の方々の病氣不幸等もあり、委員長も有馬純義先生から上野清香先生へ引きつがれ、約八年の歳月を経過しました。

幸に、伊集院町の有馬俊郎先生、県文化財専門員の河口貞徳先生の御指導と御協力により、ここに集大成し発刊できますことは、松元町の歴史の上に残る大きな事業であり、町民の期待に応えるもので、喜びに堪えないところであります。

郷土松元が発展しつつあるこの現在には、すべて郷土の先人が残された血と汗の歴史の上に築かれているのであります。われわれ町民は、郷土の持つ良き歴史伝統と文化遺産を正しく理解し、これに創意工夫を加えつつ後世に伝承することが、先人への報恩であり、義務であると思えます。

この意味において、今回の郷土誌発刊の持つ意義は誠に大きいものがあります。

ここに、この郷土誌が町民はじめ、多くの方々に愛読され、先人の遺訓や努力のあとが後世に伝えられると共に、教育界で大きく取りあげられている郷土教育の一助となり、青少年の健全育成に、引いては郷土発展に大きく資せられることを念願いたします。

目次

発刊のことば

郷土誌の発刊にあたって

第二編 松元町の概観

第一章 松元町の自然…………… 1

第一節 位置・面積…………… 1

第二節 地 勢…………… 1

第三節 気 象…………… 2

第二章 人口と自然の利用…………… 2

第一節 人 口…………… 2

第二節 自然の利用…………… 8

第二編 先史時代

第一章 概 説…………… 11

第一節 旧石器時代…………… 15

第二節 縄文時代…………… 17

第三節 弥生時代…………… 34

第四節 古墳時代…………… 48

第二章 松元町の先史文化…………… 68

第一節 先史時代の概要…………… 68

第二節 遺 跡…………… 70

第三編 松元町の歴史

第一章 伊集院のおこり…………… 87

第一節 隼人の地…………… 87

第二節 日置の郡…………… 87

第三節 いすの院…………… 88

第四節 郡役所移転…………… 90

第五節 伊集院郡司…………… 91

第六節	伊集院百八十町	92
第二章	建久凶田帳	93
第一節	右衛門兵衛尉	93
第二節	在庁道友	94
第三節	院司清景	94
第四節	あなゆの前	96
第五節	石谷久徳	97
第六節	土橋十三町	98
第七節	石谷阿闍梨	99
第八節	谷口十四町	100
第三章	島津伊集院氏	102
第一節	系凶不審	102
第二節	島津入部	104
第三節	山田氏と石谷	105
第四節	町田助久	108
第五節	地頭の圧力	109
第六節	門貫殿	111

第四章	建武中興	112
第一節	元弘之乱	112
第二節	中興挫折	113
第三節	兇徒忠国	114
第四節	入佐・四本・直木	115
第五節	春山古城址	115
第六節	平城背後地	117
第五章	税所氏	119
第一節	税所氏相輪	119
第二節	上神殿祐継	121
第三節	満家院の税所氏	123
第四節	相輪分布図	123
第五節	小原権現	124
第六節	上坊石塔群	125
第七節	十万の開拓	128
第八節	紀姓上原氏	130
第九節	埋没の税所氏	131

第六章	伊集院氏の興亡	132
第二節	勢力膨張	132
第三節	石屋禅師	133
第四節	直林寺	135
第五節	犬追物	137
第六節	石谷支配	138
第七節	石谷三十町	140
第八節	石谷高久	141
第七章	本家直轄	143
第一節	島津忠國	143
第二節	諏訪社番帳	144
第三節	古城村	146
第四節	持ヶ丸名	147
第五節	松本名	149
第六節	島津氏衰微	150
第八章	地域振興	152
第一節	生産力向上	152

第二節	熊鷹大明神	152
第三節	大鳥大明神	154
第四節	鎮守・若宮神社	156
第五節	台地へ移住	160
第九章	伊作島津氏の興起	161
第一節	犬安丸頓死	161
第二節	姿は野辺の煙	163
第三節	少年守護職	165
第四節	忠兼返り咲き	167
第五節	小長崎大明神	167
第十章	近隣制圧	169
第一節	永吉と改名	169
第二節	狐火先頭	170
第三節	稻荷社建立	171
第四節	諸壘降伏	173
第五節	痛恨伏之原	174
第六節	橋口兼弘	177

第七節	竹之山・福山制庄	178
第八節	加世田・市来攻略	180
第九節	守護城下町	180
第十一章	雪岑東堂	183
第一節	旗鼓北上	183
第二節	琉球交際	185
第三節	泰定山廣濟寺	186
第四節	瑞雪山善福寺	187
第五節	再渡海	190
第十二章	町田久倍	192
第一節	菱刈征討	192
第二節	市山地頭	194
第三節	耳川合戦	195
第四節	伊集院地頭	196
第五節	肥後出陣	198
第六節	筑前進攻	199
第七節	大友征伐	200

第八節	関白西征	200
第九節	泰平寺伺候	201
第十節	亀寿姫	203
第十一節	歳久切腹	204
第十二節	文禄検地	208
第十三節	高麗陣	209
第十四節	検地結果	210
第十五節	義久の居城大口に定む	212
第十六節	明国再征	213
第十七節	番(蛮)戦破れ	214
第十八節	大口城代	216
第十九節	庄内大乱	217
第二十節	存松示寂	218
第十三章	島津藩	221
第一節	関ヶ原敗戦	221
第二節	妙円寺詣り	222
第三節	島津の外交	223

第四節	島津藩の成立	225
第五節	行政組織	227
第六節	石高と人口	228
第七節	直轄外の村々	230
第八節	伊集院地頭	232
第十四章	郷士と農民	234
第一節	郷士の種類	234
第二節	無屋敷士	235
第三節	高持士	238
第四節	耕地の種類	239
第五節	郷士の納税	240
第六節	門割制度	242
第七節	直木村南原門名寄帳	244
第八節	百姓年貢	249
第九節	働けはたらけ	250
第十節	庄屋どん	251
第十一節	松元町内の門名	251

第十二節	春山鹿倉	252
第十五章	石谷二百年史	258
第一節	石谷姓を興す	258
第二節	町田姓にかえる	264
第三節	石谷領の確立	265
第四節	石谷の住人	267
第五節	宗門改帳	269
第六節	領主の系譜	272
第七節	町田民部久成	276
第八節	石谷と有馬新七	285
第十六章	明治維新へ	291
第一節	長州征伐	291
第二節	京都警衛	294
第三節	伊集院郡山隊の活動	295
第四節	外城三番隊名簿	298
第五節	京都藩兵増強	300
第六節	鳥羽伏見の戦	302

第七節	第二次伊集院郡山隊	304
第八節	北陸征討	306
第九節	小出島合戦	307
第十節	長岡城攻防戦	308
第十一節	北越席捲	310

第四編 現代

政治部門

第一章	政治	313
第一節	明治維新	313
一、王政復古	313	
二、藩政の改革	315	
三、郡制の実施	319	
四、戸籍の編成	322	
五、徴兵令の公布	323	

六、地租改正	326	
第二節	市町村制の施行	327
一、市町村制度の改変	327	
二、上伊集院村・松元町の成立	330	
第三節	議会・選挙	332
一、県会の開設	332	
二、国会選挙	333	
三、町村議会の開設と変遷	334	
四、町村会議員	337	
第四節	町行政機構の推移	340
第二章	財政	342
第一節	町村制施行前の財政	342
第二節	町村制施行と町村財政	343
第三節	大正時代の財政	347
第四節	昭和時代の財政	349
一、戦前の財政	349	
二、戦後の財政	351	

第三章 警察・消防・交通安全	358
第一節 警察	358
一、警察制度の誕生	358
二、鹿児島県警察の起源と変遷	359
三、伊集院警察署の沿革	360
四、駐在所	362
五、直木駐在所の沿革	362
六、松元駐在所の沿革	363
七、上伊集院駐在所の沿革	364
第二節 消防	364
一、消防の移り変わり	364
二、松元町消防団の沿革	366
三、消防団の活動	366
四、松元町消防後援会	366
五、歴代消防団長	367
六、表彰	367
七、自然災害	367

八、救急車出動回数	369
九、松元町消防団規則	369
一〇、松元町消防団条例	370
一一、松元町消防団賞じゅつ金条例	371
第三節 交通安全	371
一、交通安全	371
二、松元町交通安全町民会議	373
三、交通安全協議会	373
第四章 軍事	378
第一節 台湾の役	378
第二節 西南の役	380
一、当時の国内情勢	380
二、西郷の下野と私学校	381
三、開戦の近因	382
四、出陣と戦況概要	383
五、戦後の処理	383
六、郷土と西南の役	384

第三節 日清戦争……………	395
一、概 況……………	395
二、本町からの従軍者……………	396
第四節 日露戦争……………	396
一、概 況……………	396
二、本町からの従軍者……………	397
三、二木新吾陸軍看護長の功績……………	398
第五節 第一次世界大戦……………	399
第六節 濟南事変と満州事変……………	400
第七節 日華事変……………	401
一、概 況……………	401
二、本町の戦没者……………	402
第八節 大東亜戦争……………	403
一、概 略……………	403
二、元歩兵第七十一連隊慰霊祭弔詞……………	405
三、大東亜戦争戦没者名簿……………	407
四、大東亜戦争復員者名簿……………	424

産業・経済部門	
第一章 農業……………	461
第一節 自然条件……………	461
第二節 土地及び人口……………	462
第三節 農地政策……………	464
第四節 耕地の改良保全……………	468
第五節 農村振興……………	471
第六節 農業生産……………	473
第七節 農機具……………	496
第八節 農業団体……………	500
第二章 商工業……………	506
第一節 商 業……………	506
一、明治・大正時代……………	506
二、昭和時代……………	508
(一) 饅頭石商店街……………	508
(二) 松元商店街……………	509

(三) 仁田尾商店街	510
(四) 松元町商工会	510
(五) 商業の現状	512
第二節 工業	513
一、明治・大正時代	513
二、昭和時代	516
第三章 金融財政	517
第一節 金融	517
一、個人間の金融	517
二、頼母子講	518
三、金融業	519
四、産業組合	520
五、郵便局	523
第四章 林業	525
第一節 林業の概要	525
一、林業行政	525
二、林道の整備	525

第二節 町有林と民有林	526
一、町有林	526
二、民有林	528
三、町内模範山林	532
第三節 森林組合	533
一、町森林組合	533
二、日置地区森林組合統合設立	537
三、日置地区森林組合事業運営	537
四、特記	539
交通・通信部門	
第一章 交通・運輸	539
第一節 乗合馬車・運送業・車両	539
第二節 鉄道の開通と発達	542
第三節 乗合自動車（バス）の運行	547
第四節 道路の開発	548
第二章 通信	556

第二章 郵便	556
福祉・保健部門	
第一章 社会福祉	562
第一節 社会福祉制度の変遷	562
一、戦前の福祉制度	562
二、戦後の福祉制度	562
第二節 社会福祉事業の実際	563
一、社会福祉一般	563
二、生活保護制度	577
三、児童福祉	578
四、母子福祉	586
五、心身障害者福祉	587
六、老人福祉	591
七、国民年金	599
八、旧軍人軍属の恩給	602
九、その他	603

第二章 保健・衛生	607
第一節 保健行政の沿革	607
第二節 公衆衛生	608
一、衛生組合	608
二、清潔検査	609
三、隔離病舎	610
四、急性伝染病	610
五、伝染病の流行	612
六、結核	613
七、寄生虫の駆除	613
八、そ族昆虫族駆除	613
九、狂犬病	614
一〇、成人病と死因順位の変遷	614
第三節 医療と施術	615
一、開業医	615
二、本町の医師	616

三、薬剤師……………	618
四、薬舗、売薬業……………	618
五、齒科の治療……………	618
六、鍼灸・按摩……………	618
七、助産婦……………	619
八、民間療法……………	619
第四節 栄養改善と食品衛生……………	619
一、体格……………	619
二、母子保健……………	622
三、栄養改善……………	623
四、食品衛生……………	624
第五節 環境衛生……………	625
一、簡易水道……………	625
二、塵芥処理……………	632
三、し尿処理……………	634
四、墓地と埋葬……………	635
第六節 国民健康保険……………	636

教育・宗教部門

第一章 学校教育……………	643
第一節 教育制度の移り変わり……………	643
一、幕末維新期の教育……………	643
二、明治初期の教育……………	645
三、明治後期の教育……………	649
四、大正、昭和初期の教育……………	654
五、戦時下の教育……………	656
六、戦後の教育……………	659
(一) 国民学校を小学校と改称……………	660
(二) 新制中学校の発足……………	661
(三) 学校給食の開始……………	662
(四) 幼児教育……………	663
第二節 学校沿革……………	666
一、松元幼稚園……………	666
二、松元小学校……………	667

三、東昌小学校	669
四、春山小学校	672
五、石谷小学校	675
六、松元中学校	678
第二章 社会教育	680
第一節 社会教育	680
一、少年の教育	680
二、青年の教育	682
三、婦人の教育	686
四、父母と教師の会（PTA）	692
第二節 社会教育施設	694
一、公民館	694
二、図書館	699
第三節 社会体育	700
一、社会体育施設の充実	700
二、社会体育指導者	701
三、スポーツ団体	702

四、各種スポーツ大会	704
第三章 教育行政	706
第一節 教育行政	706
一、明治初期の教育行政	706
第二節 教育令の制定	707
一、学制の廃止と教育令	707
二、改正教育令	708
三、教育令の再改正	709
第三節 教育行政の近代化への動き	709
一、最初の小学校令	709
二、小学校令の改正	710
三、教育の根幹に道徳をおく	710
四、国庫補助と教育費	711
第四節 戦時下の教育行政	712
一、戦争体制への推移	712
二、義務教育の国庫負担と学校施設	712
第五節 戦後の教育行政	712

一、総司令部の教育制度の管理	712
二、教育委員会の発足	713
第六節 独立後の教育行政	713
一、国庫補助の充実	714
二、教育委員会制度の改正	714
三、諸教育行政	715
第四章 宗 教	717
第一節 神 社	717
第二節 寺 院	721
第三節 一向宗と松元町の隠れ念仏	725
第四節 その他の宗教	728
第五節 松元町内に現存する民間信仰の対象物	730
文化部門	
第一章 文化財	735
第一節 概 説	735
第二節 指定文化財	735

一、県指定文化財	735
二、町指定文化財	736
第三節 その他の文化財	739
第四節 郷土芸能	751
第二章 文化団体	756
第一節 文化協会	756
第二節 松元太鼓同好会	758
第三章 風 俗	761
第一節 年中行事	761
第二節 生活の変遷	769
一、戦前の生活	769
二、戦時中の生活	775
三、戦後の生活	779
第三節 人生儀礼	781
一、出産、育児	781
二、新生児	782
三、幼児から青年まで	783

四、結婚	784
五、死 喪	785
第四節 子どもの遊び	788
第五節 講	797
第六節 伝説、民話	803
第七節 裡諺・俗信	810
年度別一般会計決算額	821
桜島噴火現況を知らせる手紙	823
桜島爆発に関する思い出 三編	826
入佐婦人会会則	828
松元町出身教員養成学校卒業者名簿	830
全国復員引揚者地域別統計表	832
鹿児島県復員引揚者数	832
松元町引揚者名簿	833

資料編

松元町小字名一覧	841
松元町小字図(大字別)	845
年表一	853
年表二(町制施行後)	859
第三編中世編、索引	864